里山は悲鳴をあげている

下草刈りが行われ、落葉掻きの済まされた山は、早春の風が吹いています。山桜の芽吹きと開花。ミツバツツジの蕾の膨らみ。そして、タチツボスミレ、シュンラン、ショウジョバカマ、イワナシなどが自生しているのが良く分ります。エビネもあったと思う。枯れ木など１本も無い。杉や桧は、枝打ちされ、松は、悠々と育っています。ナラ、クヌギなどの雑木は、適当に伐採されるので、大木になった物は無い。マダケ、ハチクの竹藪は手入れされ、枯れた竹は一本も無い。桿の伸びた竹は、少ない。竹藪にも適当に光線が注いでいるので、様々な植物が自生しています。シュンランの花が咲き、仄かな香りがする。ワラビも沢山上がり、初夏には、ササユリの香りが漂う。子供たちは、山を遊び場にしていた。カブトムシ、クワガタ捕り。落葉滑り。木の実採り。茸狩り。これが、かつての里山の姿でした。

松は枯れ、枯れ木だけが残っている。今にも倒れそうに風に揺れている。ナラやクヌギは、大木になり、生息している松は風前の灯です。周囲は竹が一面にはびこり落葉が積もって、陰樹だけが何とか育っています。枯れた竹が不気味に音を立てているのです。杉や桧は、思いっきり植えられ、手入れもされず、弱々しく育っています。桿の長い竹の大繁殖と雑木の大木化は、他の植物を受け入れようともせず、勢力を伸ばしているのです。そして、植林された木々をも食いつぶさん勢いです。動物や昆虫も少なくなる、山野草も減少しています。ササユリなどは影も形もありません。竹の生えていない山は、笹と茨で分け入ることが出来ないジャングルです。これが現在の里山と言えましょう。

人々は、樹木、草などを燃料にして生活をしておりましたが、今や、化石燃料が主体で、植物燃料の利用が少なくなりました。又、材木としての利用も安価な海外の樹木に圧され日本産の樹木の利用も極端に減少しました。これらの植物は、見捨てられてしまったと言えるのです。見捨てられた植物は、一人歩きも出来ずに枯れてしまうもの、或いは、勢力を旺盛するもの又中間もあります。その例は、松枯れ、雑木の大木化、竹の大繁殖です。

文華苑の牡丹

文華苑の笹百合

かつての里山は、人間が自然を利用して作り上げて来たもので、植物達もその環境に適応して来たのだと言えましょう。現在の里山は、人間に忘れられた数種の植物が、自然環境に適応し、生育しているのだと言えるので、人間の目から見るのと随分異なります。しかしながら、全くの自然そのものでなく、人間が環境に悪影響を与えている以上、それらの植物にとっても過酷な自然と言うより他ありません。

自然にとって掛け替えのない人間が、自然から離れ、自由気儘に行動し、自然のリサイクルの役目を忘れてしまったとしたら、とんでもない結果が待ち受けているのではないでしょうか。かつての里山を蘇らす程のことが出来れば、良いのでしょうが、不可能になっているのが現実です。

学園前の繁華街の真ん中に、かつての里山に近い手入れがされ、今でもササユリの自生が見られるのが、大和文華館の文華苑です。この様な苑は、貴重な存在です。来館されるお客様に安らぎと感動を与えてくれる場として、四季折々の樹木、草花も植え付け、花の絶えることがない素晴らしい苑です。館員の今日までの手入れの蓄積の結晶が花開いたと言えましょう。

松枯れと雑木の大木化が、現状に悪影響を与えつつありますが、手入れを怠ることなく、苑の環境の維持に努めて参りました。日々の観察と迅速な処置が必要です。自然に生えた植物に付いても有効なものは、育成に努めなければなりません。整枝剪定、苗木作り、苗木の植え付け、移植、伐採、薬剤散布、施肥、灌水、除草、草刈り、清掃など植物の顔色をうかがいながら手入れを施してまいりました。その繰り返しが重要なことです。それだけではありません。客土、通路の整備、看板名札作り、支柱立てなどこれら全てが苑の維持に必要不可欠です。手入れを怠れば、必ず植物に影響します。もともと自然に生えている植物であっても手入れを要することが多分です。

文華苑は、里山ではありません。お客様に喜んで頂くためのものです。喜んで頂くためには、綺麗な花の咲く植物、珍しい植物を植え付け育成することも大切です。花が咲くだけではいけません。周囲の環境整備も重要なことです。文華苑の大役は、美術観賞に来られたお客様に少しでも喜んで頂き、感動と再発見して頂くことです。

（平成15年２月20日　管理部　大平良一）

季刊 美のたより №142
平成15年４月４日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.